



COSSS report

Chuetsu Organization for Safe and Secure Society.

社団法人 中越防災安全推進機構 機関紙

2013 冬
VOL. 2

「災害から生きぬく力と姿勢」を育む —今、求められる防災教育とは—



紙ぶるで筋交いの効果を学ぶ子どもたち
—ながおか市民防災センターにて—

contents

特集① P2-4 「防災教育の今」
主体性を引き出し、地域に根差した教育を

特集② P5 「中越から東日本へ」
“被災地の今” —みやぎ連携復興センター 石塚直樹—

【シリーズ】「人と人」五味希・関芳之 【COSSS リレーエッセイ】「地域防災力センター改 2.0」 地域防災力センター長 諸橋 和行
【連載】コラム・視点防災 【その他】インフォメーション、施設のご案内、会員募集



特集①「防災教育の今」

1. 新発田市藤塚小学校低学年での津波防災教育公開授業の様子。

震災の教訓を次世代へ

中越防災安全推進機構が全体事務局を担っている「新潟県防災教育プログラム制作事業」が平成二十四年からスタートした。これは平成十六年十月二十三日に発生した中越大地震で集まった義援金のうち未配分金（全体の3%、約十二億円）の用途を義援金配分委員会で決定し、実施されている事業である。東日本大震災発生以前は、中越地震の経験を活かすという観点から、「地震」のみを対象としたプログラムを制作することになっていた。しかし、東日本大震災の被災地では、地震だけでなく、津波や原子力といった災害によっても甚大な被害を受けている。その経緯から、新潟県で発生し得る、あらゆる災害を対象にすべきとの意見が出され、「地震」に加え、「津波」「洪水」「土砂」「雪」「原子力」の六つの災害に関し、新潟県下の小学校、中学校において、年間十時間程度で展開できる防災教育プログラムを制作することとなった。

この事業では、東日本大震災において「釜石の奇跡」で脚光を浴びた群馬大学大学院の片田敏孝教授に事業の全体統括を依頼した。片田教授は、地域の災害文化として災いをやり過ごす知恵や、災害に立ち向かう主体的姿勢の定着を図ることを目的として、釜石市で平成十六年か

ら津波防災教育に取り組んでこられた。この学校現場での積み重ねが、今回の「釜石の奇跡」に結び付いたことは言うまでもない。この事業でも子どもたちに、災害から生きぬく力と姿勢を養うことを柱としている。災害種別ごとにワーキンググループを組織し、各災害に関する専門家を座長に据え、自治体の防災担当部署や教育委員会の担当者を交えて、プログラム制作のための話し合いを進めている。特徴的なのは、地域の小中学校から、プログラムを試験的に実践する「モデル校」が選定され、モデル校の担当教員がワーキンググループの一員として組織されていることである。プログラム制作にあたっては、日々子どもたちと向き合っている教育現場の先生方の意見やアイデアが不可欠であり、先生方から制作プロセスに関わってもらうことは、非常に重要だからである。

表1：新潟県防災教育プログラム制作事業の目的

- ① 子どもたちに「自分の命を守る力」を育み、「内発的な自助意識」の定着を図る。
- ② 被災時や他地域の災害時に他者に寄り添う力、気持ちを有する青少年を育成する。
- ③ 新潟県で想定される各種の災害時に人を死なせないための防災を実践する。
- ④ 「災害に備える文化づくり」を進め、安全・安心な新潟県を実現する。
- ⑤ 中越大地震を始め新潟県の災害の歴史や教訓・知見を次世代へ継承する。



長岡市立表町小学校（5年生）の取組

【学習の目的】

東日本大震災の被災地に向けて自分たちにできることを考え、実行する。

【学習の流れ】

① 概要を知る

「おぢや震災ミュージアムそなえ館」や山古志を見学した後、「きおくみらい」で展示パネルやiPadを用いて、中越地震の被害や復興していく地域の様子を調べる。

② 見聞を深める

福島県から柏崎市に避難した二人から、被災体験を直接聞き、生きぬくために大切なことを学ぶ。

③ 考える・実践する

自分で調べたことや、体験談を元にして、被災地応援ソングを作词。柏崎市で、福島からの避難者の方々をお招きして開催したコンサートで、応援ソングを歌う。

中越メモリアル回廊を
きっかけに

前頁では、新潟県防災教育プログラム制作事業の概要と、今後の方向性について述べた。しかし、できあがったプログラムをそのまま学習するだけでなく、児童生徒が自ら主体的に学習を組み立て、取り組む姿勢も必要である。防災教育プログラムを基盤にし、また「中越メモリアル回廊」を拠点として、各学校オリジナルの学習プログラムができることを切に願っている。ここでは、メモリアル回廊の一つである「長岡震災アーカイブセンター きおくみらい」を訪れた児童生徒たちが、震災を知ることきっかけに、

学校の「総合的な学習の時間」を利用して、その後どのような取り組みを行ったのか、その一例として長岡市立表町小学校の取組事例を紹介したい。

子どもたちにとって、自ら主体的に考え、取り組み、またその成果を発表することで、達成感が生まれるなど、受け身の学習よりも、かなり高い学習効果が期待できる。震災の記憶をどのように未来への希望につなげられるのか。各校での学習の内容や目的に合わせて、「中越メモリアル回廊」の各施設では、見学や語り部・講師の紹介、出張講座なども行っている。地域と学校のつなぎ役として、ぜひ「中越メモリアル回廊」をご活用いただけたら、幸いである。

（地域防災力センター 関谷央子）





宮城県における 復興支援員の導入

平成二十四年度より、総務省による復興に向けた人的支援の仕組み「復興支援員制度」が始まった。同年十月には復興支援員のサポート事業も導入された。本事業では、まず復興支援員、市町行政担当課、関係団体への聞き取りを実施し、今後のサポートに向けた現状把握を行った。

宮城県においては、現在二つの方法で本制度が活用されている。一つは県の事業として本制度を活用した「みやぎ復興応援隊」の取り組みである。現在、南三陸町、石巻市（石巻地区、雄勝地区、牡鹿地区、北上地区）東松島市、仙台市若林区の四市町七地区において合計二十五名程度が配置されている。

もう一つは、市町の事業として本制度を活用する取り組みである。気仙沼市、多賀城市の二市では市の事業として制度を活用し「地域支援員」を設置し、計十名程度が配置されている。

この他、現在設置を検討している市町や地区も複数あり、復興支援員の取り組みは今後さらに県内沿岸市町全体に広がっていく事が予測される。

これまで進めてきた復興支援員や関係者への聞き取りでは、地域性や向かい合う個別課題による地域個別の様々な状況

が見えてくる一方、一つの共通課題を把握する事が出来た。それは、「担当地域以外の情報を取り入れる機会が少ない」ことである。復興支援員や関係する市町行政職員、団体担当者は担当する地域では様々な関係を築き、情報を得て、地域の方向性をサポートする活動を展開している一方で、担当地域以外の復興状況・支援員活動状況に触れる機会は少なく、そのような機会を望んでいるという声を多く聴くことが出来た。

今後、実施を予定している研修会・情報発信等のサポートにおいては、上記の課題を考慮し、各セクターの領域での情報共有や支えあえる事ができるゆるやかな関係づくりをめざし、取り組んで行く。復興支援員の取り組みはまだ始まったばかりであり、成果を焦らないことが肝要である。それぞれの被災地域の復興を長きに渡り支えられる取り組みと出来るよう、息長くサポートしていきたい。



石塚 直樹

1980年新潟県佐渡市生まれ。
2008年に中越防災安全推進機構へ入社。
「地域復興支援員」などの復興を担う人材育成事業のコーディネーターに携わる。

2012年10月よりみやぎ連携復興センター
に Outreach、宮城県内で活動を開始したみやぎ復興
応援隊のサポートプロジェクトを担当する。

シリーズ 人と人

震災前、この村は外部との交流はほとんどなかった。インターンはとにかく雪がひどいからきつと来ないだろう、でももし来るんだったら受け入れようという話になった。

これまで冬の間は芒種庵を閉めていたけれど、今年は五味さんがいるから除雪のあと皆で囲炉裏を囲んで話すことが多くなったね。希さんは何でも前向きだし、謙虚な人だから皆に好かれる。もう半分娘みたいなもんで、皆から希ちゃん、希ちゃんて可愛がられている。やっぱり若い子が来るとみんなにこにこして話しかけるから。こういう人をどんどん受け入れて、村に活気を出していけたらね。

人と人とのつながりは地震後にできたことだし、そういうつながりは素晴らしいものだという気はするね。いろんな人と付き合うことができるのはやっぱり嬉しいし、人間として大事なことなんだという気がする。それはやっぱり人が入ってきて気づいた、気付かされたこと。

「震災を乗り越えて

気付いたつながり」

関 芳之

小千谷市塩谷在住。

中越地震で全壊した民家を修復し、誰でも集まれる場所として「芒種庵」を整備。現在も「芒種庵を創る会」の事務局長、塩谷分校生徒会長として塩谷集落の再生に取り組む。

五味 希

東京都出身。

地域づくりを学ぶなか、大学院を休学し、昨年8月より小千谷市東山地区の復興支援員の元でインターンを開始。現在は塩谷集落の「芒種庵」に居住し、集落の聞き取り調査や新聞発行に取り組んでいる。

生まれてからずっと東京で暮らしていたので、雪国に住むのは初めて。雪の量には驚いたけれど、除雪や雪下ろしなど、その都度、助けていただいているので生活できています。見守ってくださる方が沢山いるのであまり寂しいという風には思いません。知らない人ばかりのところに飛び込んできたけれど、いつ間にか実家のようなところが沢山あって。来る前はもっと厳しい生活をイメージしていました。

この間は阪神・淡路大震災の追悼式に行ってきました。地震があったからこそその色んなところとの縁を感じています。地震で大変だったというのはあるけれど、ここには地震がなかった地域にはない活力があるなど。集落内はもちろん、外との交流もあり、普段の生活で人とのつながりを感じています。

インターン終了までに、聞き取り調査のまとめを住民の方にお伝えして、地域を見直していただくきっかけが作れたらと思っています。

『地域防災力センター改 2.0』 地域防災力センター長 諸橋 和行

平成二十三年四月、機構内の新しい部署として、『地域防災力センター』を立ち上げた。「防災」は幅が広く奥が深い分野である。我々が今から「防災」のプロを標榜するのは実際厳しい。しかし「防災力」のプロであれば、その資質と可能性は我々に十分あると考えた。我々が展開する「防災」の視点は、平時からの関係づくりであり、協働の場づくりであり、地域のエンパワーメントである。だからこそ、『地域防災力センター』という名称にし、「自然災害に見舞われても、困難を最小限に食い止め、前向きに復旧・復興に取り組むための「地域の力」（地域防災力）を創る」ことをミッションに掲げたのである。

地域防災力センターとして二年間が経過し、我々にも地域防災力を高めるための基礎的な力がついてきた。中越市民防災安全大学、中越防災研修講座、地域防災力向上ワークショップ、防災マップづくり、平日日中の防災訓練、防災交流フェア、協働型災害ボランティアセンターなど、具体的な手法やツールもそろってきた。最近では、教員向けの防災教育プログラムの開発、小中学校でのモデル授業の実施、授業に使える資料（映像・画像等）の収集なども進めている。

平成二十五年四月より地域防災力センターは三年目を迎える。機は熟した。基礎的な活動はしっかりと継続しつつ、同

時に収益性も高めていきたいが、実はここに私の個人的なモチベーションはあまりない。これからは全く新しい「防災」の動きを創り出していきたい。決して正攻法では挑まない。正攻法の先に「！」はない。そう、防災という窓から、世の中に対して「！」を創り出していきたいのである。自分自身が想定外の驚嘆・ワクワク感を強く欲しているのである。そのためポイントは何か。それは自分とは異なる才能・視点・感性を持った人との魅力的なコラボレーションであろう。例えば「アニメ×防災」という視点から、「萌え×雪かき」という発想になり、知人に協力して同人誌を作成・発行し、年末の東京ビックサイトのコミックマーケット（冬コミ）で販売した。なぜか全



<写真1>

文英語翻訳付きである（写真1）。美人時計（bijin-tokei）という大ヒット企画がある。「美人時計であなたは一分間の恋をする」をコンセプトにして生まれた、手書きのボードを持った三百六十人の「美人」が時間を知らせるインターネットサービスである。アオーレ長岡でもそれを参考に「アオーレDE市民時計」を提供している。私ならば「ボーサイダーカレンダー」を制作する。とりあえず写真七枚で完成する「曜日」から始めたい。誰がやっても同じキャラであり、本人が全く表に出ないナンセンス加減がこの価値なのである（写真2）。

決してふぎけていっているのではない。いや、ふぎけていっているのだが、ふぎけていっているだけではない。この違いが大事である。この先にブレイクスルーの源泉となる「！」が待っていると確信している。いや、信じ込みたい。

これからの地域防災力センターの活動に注目していただければ幸いである。



<写真2>

「インフォメーション」

【沖布・天平地区防災マップ・ワークショップを実施しました】

12月18日に長岡市の沖布・天平両地区において第3回の防災マップ・ワークショップが開かれ、両集落合わせて15名の皆さんにご参加いただきました。前回までに作成した過去の被害の被害状況を反映した地図を地域の皆さんと確認し、どこが危険でどこが安全そうなのかを話し合い、被害を小さくするアイデアも出されました。

今後、これらのワークショップを基に作成した防災マップを地域に配布し、水害発生時の避難に役立ててもらおう予定です。



【「そなえ紙芝居」が完成しました】

おぢや震災ミュージアムそなえ館では、紙芝居「消防士になった まっくん」を作成しました。中越地震ときに中学生だった男の子が消防団員に救助され、その後に消防署員になる実話に基づく物語です。ご来館の際にはぜひお声掛けください。



【にいがた地域サポート人交流会を開催します】

中山間地域の地域づくりを支える「地域復興支援員」「集落支援員」「地域おこし協力隊」が相互の活動の発表や交流をはかる「にいがた地域サポート人交流会」を開催します。

詳しくは <http://www.fukkou-dc.jp/> をご覧ください。

「コラム・視点防災」

【ローリングストックのすすめ】

災害用食糧の備蓄、どうしていますか？温めいらずのレトルト食品、水だけで食べられるご飯など、便利な非常食がたくさん回っていますよね。

しかし、普段食べない非常食。大量にストックしたものの、おいしくなかったり、消費期限が切れていたり、無駄になるケースも多いようです。そんな時に取り入れてほしいのが「ローリングストック法」。「回転させながら蓄えていくこと」という意味で、特別な非常食を用意するのではなく、普段使うものを多めに買って置き、消費しながら補充していく方法です。古いものから順に使っていけば、常に新鮮なものを備蓄できます。保存期間の長いもの、缶切り等の道具がなくても食べられるもの、お湯や火がなくても食べられるものを用意しておく便利です。個人的におすすめなのが、お酒のおつまみ。乾きものやチーズなどは、日持ちするものが多く、高カロリーなので体力の消耗を防いでくれます。が、普段の生活で摂取しすぎてしまうと体脂肪も同時にストックされてしまいますので、食べすぎにはご注意ください。



(地域防災力センター 関谷央子)

会員募集中！

当機構では私たちを応援してくれる会員を募集しています。
 地域防災への取り組みや被災地への支援活動に賛同し、応援いただける会員を募集しています。
 正会員：年会費5,000円/年
 団体賛助会員：100,000円/年
 個人賛助会員：3,000円/年
 ※申込書は当機構ホームページよりダウンロードできます。詳しくは本部事務局までお問い合わせ下さい。

施設のご案内

長岡震災アーカイブセンター きおくみらい

【住所】
〒940-0062
新潟県長岡市大手通 2-6
フェニックス大手イースト 2 階
【開館時間】
【入館無料】 10:00 ~ 18:00
【休館日】
毎週火曜日 年末年始
【TEL】
0258-39-5525
【FAX】
0258-39-5526
【e-mail】
kiokumirai@cosss.jp

おぢや震災ミュージアム そなえ館

【住所】
〒947-0026
新潟県小千谷市上ノ山 4-4-2
小千谷市民学習センター「楽集館」2 階
【開館時間】
【入館無料】 9:00 ~ 17:00
【休館日】
毎週水曜日 年末年始
【TEL】
0258-89-7480
【FAX】
0258-89-7485
【e-mail】
sonae@cosss.jp

川口きずな館

【住所】
〒949-7503
新潟県長岡市川口中山 144-1
川口運動公園内
【開館時間】
【入館無料】 10:00 ~ 17:00
【休館日】
毎週火曜日 年末年始
【TEL】
0258-89-3620
【FAX】
0258-89-3621
【e-mail】
kawaguchi-info@cosss.jp

ながおか市民防災センター

【住所】
〒940-0082
新潟県長岡市千歳 1-3-85
ながおか市民防災センター 2 階
【開館時間】
【入館無料】 9:00 ~ 18:00
【休館日】
年末年始
【TEL】
0258-36-8141
【FAX】
0258-86-7789
【e-mail】
info@c-bosai-anzen-kikou.jp

やまこし復興交流館 準備室

【住所】
〒940-0204
新潟県長岡市山古志竹沢甲 1377
山の学校 (通称ロータリーハウス)
【TEL】
0258-41-1203
【FAX】
0258-41-1204
【e-mail】
memorial@cosss.jp

社団法人 中越防災安全推進機構 機関紙 <COSSS report> 第2号 2013年2月発行

発行人：山口壽道 編集：小柳桂太 関谷央子 日野正基 松井千明 制作・デザイン：日野正基
 〒940-0062 新潟県長岡市大手通り 2-6 フェニックス大手イースト 2F 長岡震災アーカイブセンター-きおくみらい内
 TEL: 0258-39-5525 FAX: 0258-39-5526
 E-mail: info@c-bosai-anzen-kikou.jp <http://c-bosai-anzen-kikou.jp/>